



若者国際連合-2

UNITED NATIONS FOR YOUTH

～若連が動き始めた～

mor i 3580

我々大人たちは、生活や業界等のしがらみにがんじがらめになっていて、現状を改革しなければならぬと思っけていても、なかなか踏み出せないでいる。

国際連合は第二次世界大戦終了後、勝ち組であったアメリカ・イギリス・フランス・中国・ソ連の5か国が中心になって結成された。この5か国は国連安全保障理事会の中で、自国に不利な決議の場合には拒否権を行使できることになった。戦後70年たっても、それは変わらない。拒否権があるためにせつかくの国連が十分に機能を発揮できないことがあった。長時間の議論の末に多数決で決めても、たった一国の拒否権行使のために否決されるという事態になる。これは民主主義とは言えない。日本は負け組であったため随分後になって国連加盟を認められた。

20世紀には第一次、第二次と世界大戦があり、戦争には各国ともうんざりしていたから、国際連合を結成し、憲章には「1.国際の平和及び安全を維持すること」「2.諸国間の友好関係を発展させること」「3.経済的、社会的、文化的、人道的な問題の解決のため国際協力を達成すること」などを決めたという。全てのことを戦争によらず話し合いで解決するという決心で発足したという。ところがいつの間にか国連軍を創設し、国連決議に反する場合には軍事行動を起こせるようになった。これは当初の国連創設の意義とは相いれない。長年の戦争にうんざりして国連を結成したのに、国連自体が国連軍を結成して、国連決議に反する国を攻撃するのはどうしたことか。

第二次世界大戦後、それまで欧米諸国の植民地にされていた国々が苦難の末独立を果たして、続々と国連に加盟するようになった。今では、「人類は平等」は国際常識となり、「植民地支配は悪」が国際的に定着したといえる。かつて植民地にされていた国々が独立を果たしたあと、続々と国連に加盟し、数の上では欧米諸国を圧倒する勢いとなった。

第二次大戦と関係なく、または植民地として搾取の対象になっていた国々が多くなっているのに、国連ではいまだに拒否権が認められている。つまり世界大戦後70年もたっているのに、国連は大戦を引きずっているのである。

この矛盾を今の若者がどう判断するのかというのがこの電子書籍の出版意図である。戦争の加害者でもなく、戦争の被害者でもない戦後生まれの若者たちがこの矛盾をどう解決するのか、聞いて見たいと思っけていたら、すでに世界の若者たちの中には、そういうことを考え動き出した先見の明ある者がいることがわかった。戦争になればまず犠牲になるのは若者である。経済格差や貧困に苦しんでいるのも若者である。

テロは格差是正の根本解決にはなりえない。テロは貧困絶滅の根本解決にはなりえ

ない。一時的に長年の恨みを晴らすことにはなるかもしれないが、根本解決にならないことはテロリストやその予備軍の人達もわかっている。人類始まって以来人類が追い求めてきた理想「基本的人権の尊重」「人類は平等」はすでに国際常識となっているように思えるが、21世紀中には「暴力は悪」「戦争は悪」も国際常識として定着するに違いない。若連（若者国際連合）はいろいろなしがらみに縛られる大人たちの造った国連の矛盾を解決すべく動き出している。

第1章 生きていて、生きがいとか大事なものが無い

Q: 生きていて生きがいとか大事なものが無いという人には...?

Q: 選挙の時の注意点は?

Q: 若者国際連合（若連）は本当にできる?

Q: 若連を創ろうという動きがでてきた?

Q: 政治家側の動きは?

Q: 人生において、生きがいとか大事なものを持ちたいが...?

第2章 なぜ戦争体験者は体験を語らないのか?

Q: 戦争体験者はなぜ体験を語らないのか?

Q: 若者は戦争の実態を知らないのだから話してほしい。

Q: 「やられる前にやれ」という人もいるが...?

Q: 戦争は時代遅れと言いきれるのか?

Q: アメリカの銃犯罪をどう思うか?

第3章 人間とはなにかを追求して

Q: 世界平和に対する将来の漠然とした不安があるが...?

Q: 「平和論」は理想にすぎないのではないか...?

Q: 他に関連がある意見があれば聞きたい。

第4章 経済格差は諸悪の根源

Q: 経済格差がひどすぎると思うが...?

Q: テロも格差が原因の一つ...?

Q: 格差解消と貧困絶滅のために若者のやることは?

Q: 派遣社員の制度をどう思うか?

Q: アベノミクスについてどう思うか?

Q: 今までの中で格差是正を実行した人は?

Q: エンゲル係数とは?

第5章 若者国際連合はなにをするのか

Q: 若者国際連合は何をする?

Q: いい社会とはどういう社会のこと？

あとがき

第1章 生きていて生きがいとか大事なものが無い

Q: 生きていて生きがいとか大事なものが無い、愛する家族や恋人もいないし、仕事は派遣だし、生きていて良いことなんか何にもないという人には、どう言うのか？

A: あなたにとって、あなたの生命が最も大事ではないか。この世に生きているだけで幸せという人もいる。生きてさえいれば、あなたの望む方向にこの世の仕組みを変えることだってできる。あなたの望む方向というのをはっきりさせることが出発点になる。それにはまず自分で考えることが必要になる。自分の望む方向がある程度はっきりしてきたら、その内容を同じくらいの年齢の人達に話してみる。人それぞれだから、あなたの望む方向と違う意見の人もいるだろう。もしもあなたの意見と同じ部分があれば、それを共通部分として輪を広げてゆく。

これを何回も何十回も何百回も続けてゆくと、同じ方向を目指す人が増えてきて、一大勢力になることもある。これから長い人生を送る若者たちが結束すれば、現在および未来は開けてくる。

Q: 選挙の時の注意点は？

A: 既成政党の公約の中に、自分の望む方向と同じようなことがもしもあればその政党を支持して、選挙の時にその政党の候補者に投票すればいいが、選挙の争点をわざわざずらして、有権者の関心を引き選挙に勝とうとすることがあるから、十分気を付けないと。最近では、憲法を変えたいという本心を隠して、有権者の関心を引きやすい経済問題を争点として、選挙に勝ったら本心が出てきたという事例がある。一票を投じる前によくよく検討しなければならないことを、有権者が学ばせてもらったことがある。

Q: 「若者国際連合（略称 若連）」なんて本当にできるだろうか？

A: 現在の国連は「戦争と破壊の世紀」といわれた20世紀にできたもので、そのまま制度や運営が続けられてきたが、「まえがき」で触れたように70年もたって国際常識や時代の変化に耐えられないようになってきている。これを現代の若者たちが、現在および未来の地球社会を考え、どう判断するかにお任せしたいと思っている。大人たちはいろいろなしがらみにがんじがらめになっていて国連改革などできないと思っているが、しがらみの少ない若者たちならできると思う。出身国を離れ一地球人として考える必要が

あると思ううがどうだろうか。戦争は大人たちが始め、まっさきに犠牲者となるのが若者と決まっている。戦争をしないため、若者が戦死しないためには、世界中の若者が出身国を離れ一地球人として結束することが必要不可欠であり、それを行う場は「若連」しかないと思う。

Q: その「若連」を創ろうという動きが出てきたというが...?

A: 大戦終了後70年たって、世界の若者たちが気づき始めたといつてよいのではないか。アラブ諸国の民主化が進み「アラブの春」と呼ばれた現象や久しく軍政が続いたミャンマーが民主化されたこと、香港の民主化を求める学生たちの運動、今年（2016年）大統領選挙のあるアメリカの若者の動きなど、それぞれ国という単位の中ではあるが、一地球人としての意識が広まりつつあるのを感じている。

2016年6月5日の東京新聞朝刊によれば、日本でも若者の好むアニメや演劇等のエンターテインメントで憲法を学ぶ動きが出始め、「明日の自由を守る若手弁護士の会（あすわか）」では憲法を演劇で表現するという。2016年7月の参議院選挙から、選挙権年齢が今までの20歳から18歳へと引き下げられるのを機に、少しずつではあるが若者の政治意識が高まってきているようだ。

原発再稼働反対や安保法反対のデモにも、若者の参加が増えているという。

また一時期政府の意向を先回りして自粛しているかのように見られたマスコミが元気を取り戻してきたようにもみえる。政権批判の意地を見せたテレビ番組のギャラクシー賞受賞が相次ぎ、受賞者のひとりが「忖度（そんたく）のその字もないような番組を作ってみたかった」とスピーチしたと伝えられた。

Q: 政治家側の動きは？

A: 既成政党側も、今年7月に行われる参議院選挙対策として、選挙権年齢引き下げにより一挙に増える18歳、19歳の若者向けの働きかけを行っている。各党ともいろいろな方策により、我が党への支持を訴えているが、若者側の反応は「よく分からない」が80%以上あり、どちらも戸惑っていることがうかがわれる。

私自身、若者たちとの溝を埋めるために、電子書籍無料公開という未知の世界へ挑戦してきたが、激変といわれる現代では、70年もたてばすっかり様変わりして、老若双方の歩み寄りの努力が必要であることがわかってきた。

政治家側も有権者側も、歩み寄りの必要なことは分かっているが、日本が民主主義の

国であり、国民主権の国であることを忘れてはいけないと思う。

私自身84年生きてきて、世の中の変化の速さ、激しさに驚いている。私の長男と次男との年齢の差はたった5年だが、お互いに変化の激しさを感じているようだ。激変の時代には、世の中の激しい変化を乗り越えてゆくには、世代間のコミュニケーションをもっともっととる必要があると思っている。私は中学・高校の同窓会の中で、世代間のコミュニケーションを取りやすくするためのサロンを開いている。また出身大学の新入生のためのお祝いの会を毎年開いている。こういう席で注意することは、「先輩風を吹かさない」「後輩も遠慮しない」つまりお互いに「さん」づけで呼び合い、先輩も後輩も、男性も女性も、平等を意識し実践することと思っている。

私はラジオの時代に生まれ、電化生活の躍進の中で育ったが、それでも最近の情報時代についてゆくのは難儀である。同世代の友人の中には「パソコンに触らないで済む幸せにどっぷりつかっている」と、言う人もいる。

人それぞれの生き方であるが、私は激変の時代ほど世代間のコミュニケーションが大事だと思っている。日本がアメリカと戦争して負けたという事実さえ知らない後輩がいる、と知ったとき、これでは今後戦争に巻き込まれる恐れがあると感じた。同じ過ちを繰り返さず、みじめな敗戦とならぬようにするためには、体験者が世代を超えて話し続けることが必要と思っている。

Q: 生きがいとか、人生において大事なものをもちたいと思っているけれど...?

A: 誰もが生きがいや、人生において大事なものを持てる社会をつくることであり、それは子供と若者が生きる希望を持てる世界と日本をつくることである。若者の選挙権年齢を下げる動きは世界的に広まっており、18歳以上が世界の趨勢となっていると伝えられている。これは世の中の変化が早く激しいという状況に合っていると思われる。医療環境が整い、平均寿命が伸びる傾向にあることは評価されるが、一方で子供や若者が生きる希望を持たない社会が来ているともいわれている。

子供や若者が希望を持てる社会は、若者がその仕組みを考え、実行することでできるのである。戦争ばかりやっている大人たちは、少年兵を生み、児童労働を強制する立場に立っている。最近まで子供であった若者が子供の気持ちを考えて、子供と若者が生きる希望を持てる社会をどう作るかを考え、討議して実現するのである。そういう社会をつくるための選挙権年齢の引き下げだ。生きがいがない、何のために生きているのかと言う間に、自分たちの望む世界を作ればよい。選挙権年齢の引き下げには、大人たちの思いや願いもこもっているのである。

第2章 戦争の経験者はなぜ戦争を語らないのか

Q: 戦争経験者はなぜ戦争を語らないのか？私たちは平和の中で生まれ育ったので、戦争は怖いと聞いてもよく分からない。

A: 私は兵隊として戦地に行ったわけではない。アメリカ軍の空爆で、中学生の時に、我が家と学校を焼かれた空襲体験者である。卒業50周年の記念行事として、その時の体験を文集として出したいと提案したが、「あんなつらいことをわざわざ思い出して書かせるのか」という意見もあった。結局32名の賛同を得て発行したが、戦争を語らない理由の一つとして、「あんな辛いことを思い出したくない」という気持ちがあると思う。空から爆弾が降ってくる恐怖、うちを焼かれる恐怖は忘れられない。それに、戦争は人間に正常な判断をできなくさせるので、正常な今狂った時の自分を思い出したくないということもあるだろう。また、敗戦直前の沖縄戦を除いて、他国の領土で戦闘をして他国の人々に多大の迷惑をかけたから言いたくないという人もいるかもしれない。

要は、「戦争は思い出したくないほど悲惨だ」ということだと思う。経験者が語らないということは「絶対に戦争をしてはならない」というメッセージだと思う。目の前の敵を殺すか、自分が殺されるかというのが戦争の実態だから、思い出したくないという気持ちは分かる。

Q: それでも経験者には話してもらいたいと思う。若者は戦争の実態を知らないのだから...

A: 私は "戦争を知らない若者たちに..."そう思って文章にしたり、直接話したりしているが、これからもさらに続けようと思っている。空爆でうちや学校を焼かれた同じ経験をしてきても、いろいろな考えがあるから、無理に話せとはいわないが、私は今後も話し続けようと思っている。

私は、世の中の変化が激しいほど、それぞれの世代の人生経験は変わってくるから、一つの社会を構成するためには、もっともっとお互いにコミュニケーションを取る方向に行かなければならないと思っている。「暴力は良くない」ということは、日本では家庭・学校・職場・人間関係のすべてで定着してきているが、暴力＝軍事力と考えれば、軍事力を増強したり、国家間の紛争解決のために、軍事力を使うのには抵抗があるはずだ。「軍事力の行使は良くない」という国際常識を定着させるのが、世界の若者たちの使命であり、その活動の音頭を取るのが日本の若者の使命と思っている。「暴力＝軍

「軍事力は良くない」ということは、20世紀に2度の世界大戦を経験した人類の心の叫びであり、悲願であった。民主主義国家は世代間の意思疎通が必要であり、暴力を使わずに自分の意見を言うことが基本であろう。「暴力は悪」が国際的に浸透すれば、「軍事力は悪」も国際常識として定着するだろう。民主社会では暴力抜きですべてを話し合いで決めなければならない。そのためには、他人の意見を尊重し、あらゆることを話し合うコミュニケーションが必要となる。

民主社会で大事なことは、他の意見を尊重する寛容さと老若男女平等の精神であろう。それに異なる意見を一つにまとめるには、かなりの工夫と忍耐を要する。最近の社会には寛容性が足りないという指摘があるが、私もそう感じているひとりである。戦争が近くなると、正常な判断がしにくくなり、みんな声高に相手を非難するようになるので、もっと余裕をもとうと呼びかけている。

Q: 「やられる前にやれ」という人もいるが...どう思うか？

A: 他国との間で緊張関係が続くと、「やられる前にやれ」という声も聞こえてくる。これが戦争の初めになることもある。「やられる前にやれ」という声は勇ましく聞こえるから、反論しにくい。「非国民、いくじなし」という言葉が付いてくると、なおさら反論できなくなる。第2次大戦の前には、こういう声がマスコミの大合唱となっていたから、当時の国民は政府もマスコミも信用できなかった。

「やられる前にやれ」という過激な言葉を吐く人が増えてきたら「要注意」である。第2次大戦の前には、「アメリカと日本の国力の差は大きい、戦争には勝てない」ことを日本政府は事前調査で知っていながら、国民には伏せておいたのである。何も知らない国民はマスコミの大合唱に乗せられて戦争に突入した。そして大勢の若者が犠牲者となったのである。

「やられる前にやれ」ということは、先制攻撃となり、「自衛のためにやむを得なかった」とはいえない。そして、他国の領土内にある基地や爆弾の製造工場を「やる」ことになり、侵略という国際批判も受けなければならなくなる。

いずれにしても、「やられる前にやる」という言葉は禁句である。そういう雰囲気にならないようにするには、近隣諸国とは日ごろから友好的におつきあいし、緊張関係にならないようにすることである。スポーツや芸能関係でのおつきあいを発展させ、商売上のお付き合いを発展させ、「やられる前にやれ」というような不穏な雰囲気にならないようにするのは民間であり、若者であると思っている。

Q: 戦争は時代遅れと言いきれるのか？

A: 人類の歴史をみれば、戦争の繰り返しである。20世紀に2つの世界大戦を経験して、終わったときには勝ち組も負け組も、戦争はうんざり、戦争をしないですむ平和の仕組みを考え、国際連合が発足した。ところがその5年後には、アメリカを中心とした資本主義陣営とソ連を中心とした社会主義陣営が朝鮮戦争を起こし、平和の仕組みを無力化してしまった。その後もベトナム戦争・イラク戦争と続き、今でも地球のどこかで戦争が行われ、子供や若者の人生が犠牲にされている。私は日本が戦争を始めた翌年に生まれ、中学の時に敗戦に終わったから、子供の時は戦争のまっただなかになっていたことになる。大人たちが戦争を始め、真っ先に犠牲になるのが若者と子供である。

人類はすでに全人類を殺せるのに十分な核兵器をもち、地球上に広く拡散させていることを知っている。核兵器の発射ボタンを人類のだれかが押せば人類全滅につながることも知っている。人類はこれまで敵を殺すために武器兵器を研究・生産してきたが、敵ばかりでなく自分を含めた味方さえ殺す可能性があるとなれば、この辺が戦争を終わらせる潮時である。しかし大人たちはどこの国でもいろいろなしがらみにしばられ、冷静に潮時を見ることができない。「やられる前にやれ」というレベルである。

人類が生き残れるか否かは、若者たちの判断に任されている。世界の若者と子供が希望を持って生きるためには、若者国連（略称 若連）の活動を通じて、戦争を終わらせるしか方法はないと感じている。

Q: アメリカ南部フロリダ州で、2016年6月12日、アメリカ最悪の銃犯罪が行われたと報じられた。この事件をどう思うか？

A: 銃を乱射し、50人死亡53人けが、犠牲者最大と伝えられたが、容疑者は射殺されているので、過激派組織「イスラム国」との関連や同性愛者への偏見等が取りざたされている。真因はまだ分からないが、高性能の銃が合法的に簡単に入手できる社会体制に問題があるとの指摘もある。オバマ大統領は「史上最悪の銃撃事件」と述べた後、銃規制強化の必要性を訴えたという。東京新聞の解説によれば、アメリカでは年間ほぼ毎日発生しており、銃の悲劇は後絶たずだそうだ。

アメリカと日本は、どちらが銃規制に厳しいか、もちろん日本である。日本で銃を入手し所有することは非常に難しい。アメリカでは憲法に銃所有は国民の自衛権保障と明記されているという。銃所有を国民に認めている憲法の国と戦争の放棄・武器の不使用を憲法に明記した国が同盟国となっている。銃を入手しにくい日本の方が、アメリカよ

り安全なのはどうしたことだろう? 国同士の場合でも同じことがいえると思うが、これも若連で議論してもらいたいことである。「安心・安全に生きるためにはどうすべきか?」

第3章 人間とはなにかを追求して

Q: 世界平和に対する将来の漠然とした不安があるが...？

A: 梅原猛先生は私の尊敬する哲学者の一人だが、2016年6月13日東京新聞夕刊の「思うままに」の欄に、「私は、人間は大量の同類を殺害する動物...」と書かれてあった。これまでの人類を見れば、梅原先生の言う通りだが、このままでは救いがない。特に若者や子供たちには、夢も希望もないと思う。

私は、今84歳、最近の世の中の行く末を心配しているひとりである。このままでは死ぬに死ねないという思いである。自分の体験をできるだけ若い人達に話し、その上で若者たちの判断に任せようと思っている。いろいろなしがらみにがんじがらめになっている大人たちではなく、しがらみの少ない若者と子供たちが希望を持って生きてゆけるような世界を目指せるよう少しは役に立ちたいと思っている。

これまでは梅原先生のご指摘の通り、人類は戦争で同じ人類を殺してきたが、人類全滅の恐れがあるとなれば別かもしれない。人類史をひもとけば、戦争の連続であったことは明白である。しかし、敵を殺す武器の研究が核に至り、敵を殺すと同時に放射能によって味方も殺す恐れがあることもわかってきた。武器という科学技術の研究が進み過ぎて、人類全滅・生物全滅の恐れがあるところまでできてしまった。これでは人類はもう戦争はできない。そういうぎりぎりのところまでできてしまった。それでも人類はなお戦争をするのかどうか、若連で十分討議してもらいたい。私は世界の若者たちを信じている。

梅原先生のいう人類を滅亡させうる危機は一つには核戦争であり、もう一つは環境破壊である。自然は征服するものではなく、人間も自然の一部として共存するものという考え方が、西洋人の間でも広まってきている。

人間は、他の動植物の命を頂いて生きる動物である。他の動植物から見れば、人間は自分たちの命を奪う邪魔者なのだろう。同類の命を奪うための道具を研究してとうとう核兵器にいたり、人類全滅・生物全滅の恐れまでできてしまった。はた迷惑もいいところである。

梅原先生の言われる、これまでの「人類は大量の同類殺害をする動物」と縁を切り、人類が他の動植物とともに生きる道を選ぶかどうかは、人類の中のしがらみの少ない若者の判断と行動にかかっている、といえる。世界の若者の出番であり、若者国際連合（略称 若連）の活動が期待される。

日本の若者たちは、戦争放棄の憲法を持ち70年不戦の誇りを胸に平和のための活動を

続けることが、人類だけでなく他の動植物からの期待に応えることになる。

Q: 「平和論」は、理想に過ぎないという人もいるが...？

A: だからこそ、現状を踏まえた議論が必要となってくる、と思う。核兵器が人類を全滅させるほどあることは事実であり、世界中の人が知っている。これ以上の核兵器を持つことはもちろん、軍事力増強では戦争を抑止することは難しい段階まできている。現状を冷静に判断すれば、暴力＝軍事力を行使せずに話し合いで解決する方法以外に、戦争の抑止力になるものはないと言えるのではないか。戦力に頼りがちな大人たちに代わり、若者たちが自分たちの将来を輝かしいものにするために、若者国際連合（略称若連）で十分討議してもらいたい、と思っている。

Q: ほかに、それらの問題に関連のある意見があれば聞きたい。

A: 思想家の柄谷行人氏の著書「憲法の無意識」（岩波新書）には「なぜ戦後70年を経てもなお、改憲は実現しないのか。なぜ9条は実行されていないのに、残されているのか...。」と扉にあったので読んでいたが、非常に有益なユニークな発想である。「あとがき」に「憲法9条は非現実的であるといわれます。だから、リアリスティックに対処する必要があるということがいつも強調される。しかし、最もリアリスティックなやり方は、憲法9条を掲げ、かつ、それを実行しようとすることです。9条を実行することは、おそらく日本人ができる唯一の普遍的かつ「強力」な行為です」と書かれている。この本は良い本だと思うので、私が紹介するよりも直接本書を読まれることをお勧めする。

私がこの本の中で最も印象に残っているのは2点ある。第1は、「憲法の無意識」と書名になっている部分である。「憲法を守ろうとか、改正しようとか意識としていると、外部からの操作を受けやすい。日本人は憲法に関して無意識であるから、マインドコントロールも受けにくい。」という点である。第2に「徳川幕府の以前400年は内戦の時代であり、明治以降100年は外国との戦争の時代であり、二つの戦争の時代に挟まれた260年に及ぶ徳川幕府の平和の時代が、日本人の平和に対する無意識のもとではないか」という点である。長い平和が続いたことで、日本文化が落語の八つつあん・熊さん・ご隠居さんの庶民に至るまで浸透し、私たち人生のはるか後輩たちの遺伝子に組み込まれたのではないかと感じた点である。私の読み方に誤りがあるかもしれない、若い人達に読後の感想を聞いてみたいと思う。

難しい問題であることは間違いない。しかし、「人間は同類を殺す生き物」とか、「人類は戦争を止められない」とか言われても、若者は自分自身や子供たちの未来を考えたら、希望を持って生きる社会をどう創ってゆくかを考えなければならない。21世紀の世界の若者たちの最大の問題であろう。若者国際連合（略称 若連）が動き出す時期である。

第4章 経済格差は諸悪の根源

Q: 経済格差がひどすぎると思うが、これを解消するには？

A: 確かに経済格差はひどすぎると思う。経済格差と貧困問題は早急に解決しなければならない、現代の人類にとって最も大きな問題といえるのではないか。まず原因を考えてみよう。資本主義体制は自由な経済活動を保証し、より良い生活を求める人間の欲をベースにしているから、経済成長をもたらすが、その結果として経済格差は広がるという弱点がある。社会主義体制は平等を目指すから、経済活動には制約がある。経済成長という点から見ると資本主義体制に及ばないという弱点がある。それに、努力してもしなくても同じ収入となると平等ではあるが、努力する人が少なくなり、さぼる人が出てくる。

社会主義の親分格であったソヴィエト連邦の崩壊により、一時期資本主義が社会主義に勝ったと言われたこともあるが、現在でもロシアや中国のように資本主義の手法を一部取り入れた国でも、国の体制が全部資本主義体制になったわけではない。また最近国交が回復したアメリカとキューバを見ても、アメリカは従来通り資本主義体制であり、キューバは社会主義体制のままと発表されている。

資本主義が社会主義に勝ったのではなく、双方に弱点があることもわかってきた。資本主義経済は経済格差を生むということは、100年も前にマルクスが「資本論」の中で指摘していたことで、私が若いころ大学で習ったことである。両陣営とも戦争の対応で、軍事力の増強に忙しく、それぞれの経済体制が抱えている弱点の補強にまで手が回らなかったのである。

現在一つの国の中の経済格差の問題と国際的には北半球と南半球の格差の問題がある。日本でも外資導入や外国人経営者の増加、正社員の減少や派遣社員の増加などにより格差が広がり、巨額の資産を所有し収入も多い大企業や富裕層が節税対策と称して「違法ではないが不適切なこと」をやっている実態が暴露されている。

Q: テロも格差が原因の一つ？

A: 私も前著「テロをなくす」の中で触れた通り、テロを起こす方の気持ちになれば、長い歴史の中で欧米諸国の植民地にされたり、常に上からの目線で差別され、現在も格差に苦しんでいる状況にあるのが原因の一つであると想像が付く。旧宗主国の責任で、経済格差の解消を行うことが「テロをなくす」のに必要と思う。

前著「テロをなくす」の中でも触れたが「テロリスト捕えてみれば自国民」という多くの事例からみて、一国の中でも早急に格差を解消することが必要となる。ところが、現在の大人たちが選ぶ政府の多くは、大企業・富裕層寄りの政策をとっている。タックスヘイブン（租税回避地）に関する「パナマ文書」報道の後でありながら、先日の日本サミットでも、先進国首脳が集まりながら有効な対策はなかった。大人たちが選ぶ基準は過去のいろいろなしがらみに配慮したものになりやすいから、格差是正にはつながらない。大人たちに任せておいては、格差是正にはならないことがよく分かったと思う。若連の出番である。

Q: 格差解消と貧困絶滅のために若者がやることは...?

A: まず大人たちの創った政府を代えることから始めなければならない。先進7カ国も含めて、今の政府は大企業・富裕層寄りの、過去からのしがらみにがんじがらめになっている政策を進めるところが多い。このグローバル時代に古臭い自国の国益優先の政策をとり、地球全体の人々のことを考える余裕がない。地球は今、核戦争の脅威と環境破壊の脅威の中で、もがき苦しんでいる。もう自国の国益などという国家レベルの我欲に振り回されている余裕などない。若者たちのやるべきことは、未来を明るくすること、地球全体を考えることのできる、若者や子供たちが希望を持って生きられる政策を進める政府と交代させることである。それには、若者たちがどんな社会を望むのかを明確にすることから始めなければならない。そして選挙の際、それを投票で示すことである。

Q: 派遣社員の制度をどう思うか?

A: 派遣社員では人は育たないと思う。派遣される行く先の会社によって、仕事の内容が変わっては、仕事をこなすだけで精いっぱい、仕事から何かを学ぶとか、改善や工夫もできないだろうと思う。天然資源の少ない日本で唯一の資源は、無限の可能性を秘めた人間であり、その能力を引き出し伸ばすのが日本での人事政策の基礎でなければならないというのが、人材育成を一生の仕事としてきた私の持論である。人間をコストとしてしか見ない政治家と経営者には、コスト削減がしやすい派遣制度が魅力かもしれないが、長い目で見れば、結局人は育たず、その会社にとって損になるだけでなく、人を安く使えば、使われた方はお金を使う余裕がないから、お金を使わず、不況が続くことになる。客にお金を使ってもらうのが不況脱出の正道であるが、客にお金を使う余裕が

なくなるような政策はとるべきでない。実際に、就職活動で苦勞している若者たちに聞いてみたいと思う。

Q: 政府の経済政策「アベノミクス」についてはどう思うか？

A: 完全に失敗と思っている。さきの衆議員選挙の際、「アベノミクス」を公約の前面に出し争点としたが、選挙で大勝すると、経済よりも安全保障に熱心となり、国民をだましたと批判された。経済すなわち国民の生活よりも、アメリカ追随の安保を優先したのである。今度の参議院選挙でも、国民をあざむく、本心と違う公約を出すかもしれない。二度とだまされないように注意が必要だ。

「アベノミクス」の3本の矢と称する経済政策は、いずれもまやかして、消費税の10%引き上げを二度も延ばすことで、その失敗は自ら証明している。お金を心配なく使いたい国民の収入を増やす、正道の景気対策を進めるのが正解である。経済格差が社会問題となっている中、小収入の人達に負担を強いる消費税引き上げ延期はもちろん、景気対策を真剣にやろうと思えば、貧困の解消を本当にやろうと思えば、消費税そのものを廃止し、大企業や富裕層の累進課税やタクスヘイブンの禁止などに踏み込めば、国民とくに若者の支持も得られる可能性がある。

新自由主義はすべて市場に任せるということと理解している。市場は欲と欲のぶつかり合う場所で、得をする人もあれば損をする人もある。市場はそれでいいかもしれないが、政治は損をした人のことも考えなければならない。市場にまかせれば富裕層が有利であり、ますます格差は広がる傾向になる。負け組や弱者に寄り添うのが政治である。

格差がひろがる傾向を放置すれば、ますます景気は悪化し、ぎくしゃくとした不寛容な社会になる。大人に任せておくと格差是正は難しいことが分かってきた。若者がどうい社会を望むのか、それを着実に実行することが格差是正につながると思っている。

Q: 今までの中で「格差是正」に実行した人は...？

A: 実在したかどうかは知らないが、「鼠小僧」という大泥棒が大金持ちから命がけて金を盗み、貧乏人に配ったという話はお芝居の中で知った。普段から意地悪な大金持ちに反感を持っていた鼠小僧は、江戸中に溢れた貧乏人を気の毒に思い、大金持ちから金を盗んでは貧乏人に配ったという。やっていることは泥棒で法律に触れているが、芝居の中では民衆の大喝采を得たという。「格差是正」は昔から時の政府が熱心に行わなけ

れば、民間から代わりをやる人が出てくるらしい。義賊＝正義の泥棒と言われたのも分かる気がする。

今「オレオレ詐欺」が社会的な大問題となっているが、情報によると犯人たちの言い分は「格差是正」に一役買っているようだ。「生命を奪うわけではなく、しかも話し合いで金だけ頂くのがそんなに悪いことなのか？」と言いたいそうだ。

泥棒や詐欺が悪いことであることは分かっている。徹底的に取り締まり、捕えたならば、法律で判断することが必要である。これが法治国家である。法治国家であれば、「違法ではないが不適切」などという言葉が出ないようにしなければならない。タックスヘイブンや知事の公私混合問題なども、違法は違法と決めておくようにした方がよいと思うが、若者の判断はどうだろうか？

Q: 最近聞いた「エンゲル係数」ってなに？

A: 2016年6月21日東京新聞朝刊に「急上昇するエンゲル係数」と題する記事があり、「家計に占める食費の割合を示し、高いほど生活が苦しいとされる「エンゲル係数」の指標が安倍政権の経済政策・アベノミクスと軌を一にして急上昇している。増えない賃金に出費を切り詰める家計の切実な姿が浮き彫りになっている。」とあった。

子供のころ食糧難で苦しみ、さつまいものツルまで茹でて食べたころの記憶がよみがえってきた。その時、親に「芋は誰が食べているんだ？」と聞いたら、「兵隊さんが食べているんでしょう。」と答えたのを思い出した。食べ盛りの子供を抱え、親は大変だったろうと思う。

このようなやりとりを、親類の兵隊さんのお兄さんに話したら、「とんでもない。食糧の補給がうまくゆかず、餓死する兵隊もいた。」との返事が戻ってきた。戦争は弾丸と同時に食糧の補給が必要なことを知った。日本には「武士は食わねど高楊枝」という言葉と「腹が減っては戦はできぬ」という言葉があるが、子供心に後者の方が本当だと思った。戦争になると食糧がなくなることも知った。

エンゲル係数という言葉は懐かしいが、それが話題になるのは、経済政策がうまくいってない、庶民の台所は苦しいという証拠である。日本には、高殿から見渡して、食糧を料理する煙が多く上がっているのを見て、「民のかまどは賑わいにけり」と喜ばれたという天皇がいたと習ったが、今の政治家は、民のかまどよりも大事なものがあるらしい。エンゲル係数の悪化はアベノミクスの失敗を示している。

第5章 若者国際連合はなにをする

Q: 若者国際連合はなにをする？

A: まず大人の政府を代えるところから始めなければならない。大人に任せておいては、しがらみにがんじがらめになっていて、地球も人類も、他の動植物も、絶滅の危機になっていることを感じていても行動に移せない。こういう状況にあることは、これから最も長く生きられる若者、せつかく生まれてきたのだから生を全うしたい若者にはとっくに分かっていることだろう。

国際的には選挙権年齢を18歳まで引き下げる傾向がはっきりしており、日本でもこの参議院選挙から18歳に引き下げられることが決まっている。大人たちには、激変の時代に対応できる政府を創ることは難しいことが分かってきたのである。これから最も長く生きる若者たちが何を希望しているのか分からなくなっている。若者たちに直接聞いてみよう、ということではないかと思う。

若者たちに知っておいてもらいたいのは、力＝軍事力を使わずに話し合いで決めること、それには若連（若者国際連合）を真に民主化して、拒否権をいっさい認めないことが大事だと思う。現在拒否権を有する5か国の若者が了承することが重要である。「拒否権返上」これは大人たちの国連では無理だろうが、若連ならばできるかもしれない。

政府を代える、政策を代える、若者と子供が希望を持って生きられるようにするには、投票に行くことから始めなければならない。選挙権を得た最初の選挙は大事である。投票に行くことが習慣になる。政治が悪い、経済政策が悪いと文句ばかり言う一生を選ぶのか、政治経済は自分たちで決める一生を選ぶのか、有権者となった最初の投票は大切である。

Q: いい社会とはどういうのをいうのだろう？

A: 人類の先人たちが命を賭けて求めてきた①基本的人権の尊重、②人類平等、③国民民主権、④平和、この4つは世界の若者たちに支持されることと思う。しかしその前に、人間が生きてゆくのに最低必要な「衣食住」と人間として生きてゆくための「基礎教育」の整備がある。

若者や子供が飢えや貧困に悩まず、希望を持って生きてゆこうという気持ちになれる社会が「いい社会」といえるのではないか。「若連」で十分討議してもらいたい。

2014年の電子書籍第1作「戦争は怖い！」を公開以来、第2作「テロをなくす」、第3作「みんな生きる」、第4作「みんな目覚めた」、第5作「若者が目覚めた」、第6作「若者国際連合」と同じく電子書籍として公開してきたが、第7作として「若連が動き始めた」を今回の参議院選挙の前に公開することになった。

今回も前作と同様、若い人達からの質問をQ & Aでまとめた。世の中は激しく早く変わりつつある。大人たちは私を含めて、その変化の速さ、激しさについてゆけない状況にある。力＝軍事力で対応するのが当たり前であった20世紀までと、人類全滅の質量を持つ核兵器の広がり、21世紀と、生き方、考え方を変えなければならないことを分かっている大人たちに対して、前途ある若者たちが動き始めた。

20世紀の2度の世界大戦を経験したあと、その反省から生まれた国際連合も、激変の時代に対応しきれなくなってきた。「若者国際連合」をつくって、戦争になれば真っ先に犠牲者となる可能性の高い若者たちに、どうすれば人類は生き残れるかを討議し実行することを託したいと思っている。

英国の国民投票において、EU離脱が決まった。大英帝国時代の栄光を懐かしく思う世代はEU離脱派が多く、若者たちは逆にEU残留派が多いと報じられた。このあたりにも、若者の気持ちが察せられる。若者たちは現在および未来をそのように感じているということだろう。若者たちが過去にとらわれず、自分たちの思うような世界を創ろうという、意気込みが感じられる。世界の若者が現在および未来の地球をどうしたいのか、を話し合う時期が来ている。

今回の日本の参議院選挙は重要である。世界が注視している。新たに選挙権を得た若者を中心とした、しがらみにとられない世代の判断を世界が見ている。新しい時代にふさわしい判断と投票行動を期待している。戦争のない地球を暴力なしで築きあげる知恵を期待している。